

原稿募集

『大学史研究通信』第23号は2000年11月30日に発行予定です。会員諸氏の現在の研究紹介、文献案内、会員主催の行事のお知らせなど、どのようなものでも結構です。皆様からの投稿を心よりお待ちしております。原稿・お問い合わせ等は通信担当者の進藤までお願いいたします。連絡先は最終ページをご覧ください。

住所・所属変更届のお願い

住所や所属（昇任も含む）に変更のある会員は「通信」担当者進藤までご一報くださるようお願いいたします。ご連絡は最終ページにございます。進藤研究室宛にお願いいたします。

『大学史研究通信』バックナンバー希望者に頒布いたします

『大学史研究通信』第14号～現在発行号まで希望者に頒布いたします。80円×部数＋郵送料（1部の場合90円、2部以上は120円）分の切手を同封の上、編集担当進藤宛までご請求下さい。ご連絡は最終ページをご覧ください。

編集後記 『通信』第22号をお送りいたします。第21号の編集後記で一橋大学の西沢保先生のお名前を誤記し「西山保先生」としてしまいました。大変ご迷惑をおかけいたしました。ここに深くお詫び申し上げます。失礼を承知で事情を説明させていただきました。編集作業と平行して行っていた前期試験のなかに「西山」という学生がいたために、無意識にそう入力してしまつたようです。今後、このようなミスのないように注意いたします。（進藤記）

『通信』編集は事務局・進藤修一が担当しております。

連絡先〒562-8558 大阪外国語大学外国語学部 進藤修一研究室内
TEL/FAX 0727-30-5355 EMAIL sshindo@pop13.odn.ne.jp

『大学史研究通信』第23号は、11月30日発行予定です。

大学史研究会事務局

〒192-0003 八王子市丹木町1-236 創価大学教育学部 坂本辰朗研究室内 大学史研究会
TEL 0426-91-4602 FAX 0426-91-9309 EMAIL sakamoto@s.soka.ac.jp

大学史研究会事務局員（五十音順）

阿沼 昭 明裕 (名古屋大学)	飯野 靖夫 (日本鯨類研究所)
大川 一毅 (早稲田大学)	木戸 裕 (国立国会図書館)
東玉 善仁 (帝京大学)	坂本 辰朗 (創価大学)
進藤 修一 (大阪外国語大学)	塚原 修一 (国立教育研究所)
橋本 敏市 (大学評価・学位授与機構)	

大学史研究通信

第22号、2000年9月31日（水）

大学史研究会

第21号の内容：新入会員・2000年度大学史研究セミナー開催アナウンス・会員ニュース・新入会員自己紹介・大学史編纂ニュース・お知らせ・事務局ニュース・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

新入会員（氏名五十音順、敬称略）以下の方々が新たに入会されました。

五島 敦子（名古屋大学大学院）

教育史、生涯教育・社会教育、高等教育

高橋 智子（東北大学大学院国際文化研究科）

物理学史、大学研究所史、実験技術史

森岡 ゆかり

中国文学・比較文化学・文学と書道の融合研究

横山 勝（横浜家庭裁判所）

戦前における大学、日本植民地下における諸学校

2000年度大学史研究セミナー

11月24日(金)、25日(土)、26日(日)

於 志學館大学 (鹿児島県)

これまで『大学史研究通信』でお知らせしてきましたように、本年度の大学史セミナーは志學館大学(鹿児島県)にて、11月24日(金)、25日(土)、26日(日)の三泊三日(金曜日から日曜日午前まで)の予定で開催されます。二見剛史会員(志學館大学)が九州地域の会員とともに現在準備を進めておられますが、二見会員のご厚意により、鹿児島空港ホテルをコンファレンス・ホテルとして予約していただきました(一泊8000円のところを7000円、朝食なし、税別)。空港および志學館大学への往復にはホテルの送迎バスが出ます。宿泊をご希望の方は、事務局でまとめて宿泊予約をおこないます。到着および出発の曜日と人数を早めに事務局までお知らせ下さい。

大学史研究セミナープログラム予定

11月24日(金) 自由研究発表(志學館大学)

14時30分 受付開始
15時 セッション開始
18時 セッション終了

11月25日(土) 特別講演および課題研究(鹿児島空港ホテル)

9時30分 特別講演 平田信芳氏(七高史研究会事務局)「戦後の七高生」
12時 特別講演終了
13時30分 課題研究「地域と大学」
17時 課題研究終了
ひきつづき総会(および懇親会)

11月26日(日) 自由研究発表(鹿児島空港ホテル)

9時 セッション開始
12時 セッション終了

術顧問を置くこと

などの業務が追加されました。

また、学院関係者の著作を収集していた「新美文庫」の取扱については、次回の学院計画において時計台全体利用の中で考えることになりました。

2000年4月20日に復刊された『関西学院史紀要』の第6号は、A6版217ページで、研究論文2編、書評論文1編などを掲載しています。今後年1回出版する予定です。

ことは関西学院が創設されて111年目になりますが、記念事業の一環として『関西学院事典』を発刊するため委員会を構成し、現在編集業務を行っております。その発刊の趣旨は、100周年記念事業として出版された『関西学院百年史』の成果を取り入れ、教職員、学生・生徒、さらには学院に連なる多くの方々、111年の歴史をもつ学院の全貌を知っていただくことにあります。したがってこの『事典』は読みやすく、ハンディな形で刊行されることになっています。

なお、前任者の山本喜一郎はことし6月1日付で財務部会計課へ異動になりました。

例会記録

明治後期における旧制高等学校入試と帝国大学・私立大学

2000年9月9日、於慶應義塾大学田町キャンパス
報告者：吉野剛弘会員(慶應義塾大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

吉野会員の報告は、明治時代後期の旧制高等学校入試を主題としたもので、旧制高等学校入学志願者・入学者・競争率や学校別入学試験実施状況、高等学校入学者平均点別表など、興味深いデータをもとに分析が行われた。報告に引き続きコメントの古屋野、中野両会員から、分析視覚や、使用された資料についてなど、さまざまな意見が寄せられ、活発な意見交換がおこなわれた。

例会終了後、田町駅前「素材屋」にて打ち上げの懇親会もおこなわれ、さらに活発な議論が続いたこともあわせて報告しておく。(進藤記)

出席者データ：(五十音順)

コメントーター：古屋野素材会員(明治大学)、中野実会員(東京大学)、
出席者：大川一毅会員(早稲田大学)、黒瀬剛秀氏(慶應義塾大学[院])、坂本辰朗会員(創価大学)、進藤修一会員(大阪外国語大学)、藤田薫氏(慶應義塾大学[院])、本多二郎会員(白線クラブ)、米山光議員(慶應義塾大学)

(自由研究発表報告予定者、五十音順、発表日時は未定)

田村 栄子 「ナチス時代の大学における女性と医学」(仮)

早島 瑛 「ドイツの大学(大学史)において卒業生(卒業試験合格者)を如何に特定するか」

福留 東土 「アメリカの大学におけるビジネス・スクールの成立」

渡辺 かよ子 「1904年セントルイス万国学術会議について」(仮)

新入会員自己紹介 (氏名五十音順、敬称略)

青柳 亮子 会員 (一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程在学中)

学部時代にルドルフ・シュタイナーの教育思想のドイツにおける受容に興味を持ち、以来教育思想史・教育社会史の観点から研究を続けています。もともと大学史に取り組んでいただけではないのですが、シュタイナー学校における教師集団に大学的機能を持たせようとしたことが、シュタイナーの試みの最も重要なもの一つではないかと最近考えるようになりました。20世紀前半から現代までの社会的文脈の中で、シュタイナーのこの試みの実現された部分・切り捨てられたり変えられたりした部分を明らかにしていくことを、この領域での目下の課題としています。この研究会を通じて、大学ではない場における大学、教育現場における教師の職業能力開発と自己啓発などについて考えを深め、シュタイナーの教育思想・実践との関わりを、彼の生きた時代から現代にわたって描き出せたら、と思っています。

なお、入会早々なのですが、この8月より、ドイツ・マンハイム大学に留学し、上記の問題関心とも関わる現地のシュタイナー学校でのフィールドワークを行なうことになっていきます。そのため、皆様とお会いする機会はもう少し先のことになってしまいうのですが、ご指導のほど、なにとぞよろしくお願いいたします。

福留 東土 会員 (広島大学大学院)

はじめまして。この度、本研究会に入会させていただくことになりました福留と申します。アメリカのビジネス・スクールの成立期をテーマに研究を行なっています。ビジネス・スクールといいますと、現在ではビジネスエリートに登竜門として、またプロフェッショナル・スクールの代表的存在として我が国でもその存在は広く知られています。19世紀終盤から20世紀初頭にかけての成立期には、新興の分野で学問内容が曖昧であり、また実利的目的を持っていたこともあって、大学内できわめて脆弱な立場に置かれていました。ビジネス教育に関するアイディアがいくつかの大学で試みられました。教育内容や威信の点で常にさまざまな葛藤を抱えていました。ここでは特に、当時の大学で依然支配的であったリベラル・アーツとの関係をどうするかという点がしばしば論じられています。このように、成立期のビジネス・スクールは今日の成功からは程

速いような状態にあったわけですが、そのような中にこそ大学教育の問題について考える際に重要な点が隠されているように思われます。

同時に、戦後の我が国において、一般教育と専門教育とがどのような関係のもとに展開してきたのかについても関心を持っています。ここでは、直接、間接にアメリカの大学における教育が影響を与えてきたことから、アメリカの大学教育の理念や実態に関する理解が必要であると思いますが、ビジネスという特定の分野に焦点化することによって、この問題の一部だけでも具体的なかたちで明らかにしていきたいと考えています。ビジネス・スクールの成り立ちに起こっていたような問題は、時代と国の違いはあるものの、上の影響関係を通して、戦後以降の我が国の抱える問題にも通ずる部分があると考えています。それを通して長期的には、我が国の大学教育がどうあるべきなのかについて考えていけたら、と思っています。本格的に研究を始めてからまだ日が浅く、さまざまな問題が頭の中で絡み合ったままの状態ですが、少しずつ解きほぐしながら前進していきたいと思っています。どうか、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

大学史編纂ニュース3

「関西学院 学院史資料室」から「関西学院 学院史編纂室」へ

関西学院 学院史編纂室事務長 高橋 正

本室は2000年4月1日付で学院史資料室から学院史編纂室に部署名を変更しました。変更になった間接的なきっかけは、1998年早々に、学院の最も象徴的な建物である時計台1階に移ったことです。それを機会に本室の今後のあり方がさまざまに検討されることになりました。その際の検討事項は次の2点でした。

1点目は、学院史の資料を収集するだけでなく、次回以降の年史編纂の準備を続ける調査・研究を継続的に行う必要をどのように担保するか、という問題でした。これは『関西学院百年史』全四巻を1994年3月から1998年3月にかけて刊行したことによって来しています。その編纂過程において明らかになったことは、本格的な年史の編纂は計画的・継続的に行われる基礎研究を前提にしなければ極めて困難であるということでした。この教訓を今後どのように生かすか、ということでした。

2点目は、時計台という学院が記念すべき中核的施設に位置することから、担う役割をどうするべきか、ということでした。

以上述べてきたような背景から、本室はことし4月に学院史編纂室と改組され、新たに将来の学院史編纂の調査・研究機能を持つことになりました。具体的には、

- ①共同研究プロジェクトの設置と研究員制度の導入
- ②その成果を公刊するための研究雑誌『関西学院史紀要』の復刊
- ③学院所蔵の美術品調査と情報の集中管理を行うこと（当面は絵画）、そのために美